

電兠海城

花鏡泉

庫文空青

「自分も実は白状をしようと思つたです。」

と汚れ垢着きたる制服を絡へる一名の赤十字社の看護員は静に左右を顧みたり。

渠は清国の富豪柳氏の家なる、奥まりたる一室に夥多の人数に取囲まれつつ、椅子に懸りて卓に向へり。

渠を囲みたるは皆軍夫なり。

その十数名の軍夫の中に一人逞ましき漢あり、屹と彼の看護員に向ひをれり。これ百人長なり。海野といふ。海野は年配三十八、九、骨太なる手足あくまで肥へて、身の丈もまた群を拔けり。

今看護員のいひ出だせる、その言を聴くと斉しく、

「何！ 白状をしようと思つたか。いや、實際味方の内情を、あの、敵に打明けやうとしたんか。君。」

いふ言ややあらかりき。

看護員は何気なく、

「左様です。撲つな、蹴るな、貴下酷いことをするぢやありませんか。三日も飯を喰はさないで眼も眩むでゐるものを、赤條々にして木の枝へ釣し上げてな、銃の台尻で以て撲るです。ま、どうでしやう。余り拷問が厳しいので、自分もつひ苦しくつて堪りませんから、すつかり白状をして、早くその苦痛を助りたいと思ひました。けれども、軍隊のことについては、何にも知つちやあるないので、赤十字の方ならば悉しいから、病院のことなんぞ、悉しくいつて聞かして遣つたです。が、其様なことは役に立たない。軍隊の様子を白状しろつて、益々酷く苛むです。実は苦しくつて堪らなかつたですけれども、知らないのが真実だからいへません。で、とうとう聞かさなひまひましたが、いや、実に弱つたです。困りましたな、どうも支那人の野蛮なのにやあ。何しろ、まるでもつて赤十字なるものの組織を解さないで、自分らを何がなし、戦闘員と同一に心得てるです。仕方がありませんな。」

とあだかも親友に対して身の上談話をなすが如く、渠は平氣に物語れり。
しかるに海野はこれを聞きて、不心服なる色ありき。

「ぢやあ何だな、知つてれば味方の内情を、残らず饒舌ツちまう処だつたな。」

看護員は軽く答へたり。

「いかにも。拷問が酷かつたです。」

百人長は憤然として、

「何だ、それでも生命があるでないか、譬ひ肉が爛れやうが、さ、皮が裂けやうがだ、呼吸があつたくらゐの拷問なら大抵知れたもんでないか。それに、苟も神州男児で、殊に戦地にある御互だ。どんなことがあらうとも、いふまじきことを、何、撲られた位で痛いといふて、味方の内情を白状しやうとする腰拔が何処にあるか。勿論、白状はしなかつたさ。白状はしなかつたに違ないが、自分で、知つてればいはうといふのが、既に我が同胞の心でない、敵に内通も同一だ。」

といひつつ海野は一步を進めて、更に看護員を一睨せり。

看護員は落着済まして、

「いや、自分は何も敵に捕へられた時、軍隊の事情をいつては不可ぬ、拷問を堅忍して、秘密を守れといふ、訓令を請けた事もなく、それを誓つた覚もないです。また全く左様でしやう、袖に赤十字の着いたものを、戦闘員と同一取扱をしやうとは、自分はじめ、恐らく貴下方にしても思懸はしないでせう。」

「戦地だい、べらぼうめ。何を！ 呑気なことをいやがんでい。」

軍夫の一人つかつかと立懸りぬ。百人長は応揚に左手を広げて遮りつつ、

「待て、ええ、屁でもない喧嘩と違うぞ。裁判だ。罪が極つてから罰することだ。騒ぐない。噪々しい。」

軍夫は黙して退きぬ。ぶつぶつ口小言いひつつありし、他の多くの軍夫らも、鳴を留めて静まりぬ。されど尽く不穩の色あり。眼光鋭く、意気激しく、いづれも拳に力を籠めつつ、知らず知らず肱を張りて、強ひて沈静を装ひたる、一室にこの人数を容れて、燈火の光冷かに、殺気を籠めて風寒く、満州の天地初夜過ぎたり。

二

時に海野は面を正し、警むるが如き口氣以て、

「おい、それでは済むまい。よしむば、われわれ同胞が、君に白状をしろといつたからつて、日本人だ。むぎむぎ饒舌るといふ法はあるまいぢやないか、骨が砂利にならうとままよ。それをさうやすやすと、知つてれば白状したものをなんのツて、面と向つてわれわれ

にいはれた道理か。え？ どうだ。いはれた義理ではなからうでないか。」

看護員は身を斜めにし、椅子に片手を投懸けつつ、手にせる鉛筆を弄びて、

「いや。しかし大きに左様かも知れません。」

と片頬を見せて横を向きぬ。

海野は睜りたる眼を以て、避けし看護員の面を追ひたり。

「何だ、左様かも知れませんか？ これ、無責任の言語を吐いちやあ不可ぞ。」

またじりりと詰寄りぬ。看護員はやや俯向きつ。手なる鉛筆の尖を嘗めて、筒服の膝に落書しながら、

「無責任？ 左様ですか。」

渠は少しも逆らはず、はた意に介せる状もなし。

百人長は大に急ぎて、

「唯（左様ですか）では済まん。様子に寄つてはこれ、きつとわれわれに心得がある。しつかり性根を据へて返答せないか。」

「何様な心得があるのです。」

看護員は顔を上げて、屹と海野に眼を合せぬ。

「一体、自分が通行をしてをる処を、何か待伏でもなすつたやうでしたな。貴下方大勢で、自分を担ぐやうにして、此家へ引込むだはどういふわけです。」

海野は今この反問に張合を得たりけむ、肩を揺りて気競ひ懸れり。

「うむ、聞きたいことがあるからだ。心得はある。心得はあるが、先づ聞くことを聞いているからのこととしやう。」

「は、それでは何か誰ぞの吩咐でもあるのですか。」

海野は傲然として、

「誰が人に頼まれるもんか。吾の了簡で吾が聞くんだ。」

看護員はそとその耳を傾けたり。

「ぢやあ貴下方に、他を尋問する権利があるので？」

百人長は面を赤うし、

「轉るない！」

と一声高く、頭がちに一呵しつ。驚破といはば飛菟らむず、氣勢激しき軍夫らを一わたりずらりと見渡し、その眼を看護員に睨返して、

「権利はないが、腕力じゃ！」

「え、腕力？」

看護員は犇々とその身を擁せる浅黄の半被股引の、雨風に色褪せたる、譬へば囚徒の幽霊の如き、数個の物体を胸はして、秀でたる眉を顰めつ。

「解りました。で、そのお聞きにならうといふのは？」

「知れてる！ 先刻からいふ通りだ。何故、君には国家といふ観念がないのか。痛いめを見るがづらいから、敵に白状をしようと思ふ。その精神が解らない。（いや、左様かも知れません）なんぎ、無責任極まるでないか。そんなぬらくらじや了見せんぞ、しつかりと返答しろ。」

咄々迫る百人長は太き仕込杖を手にしたり。

「それでどういへば無責任にならないです？」

「自分でその罪を償ふのだ。」

「それではどうして償ひましよう。」

「敵状をいへ！ 敵状を。」

と海野は少し色解てどかと身重げに椅子に凭れり。

「聞けば、君が、不思議に敵陣から帰つて来て、係りの将校が、君の捕虜になつてゐた間

の経歴について、尋問があつた時、特に敵情を語れといふ、命令があつたそうだが、どういふものか君は、知らない、存じませんの一点張で押通して、つまりそれなりで済むだといふが。え、君、二月も敵陣にゐて、敵兵の看護をしたといふでないか。それで、懇篤で、親切で、大層奴らのために尽力をしたさうで、敵将が君を帰す時、感謝状を送つたさうだ。その位信任をされてをれば、種々内幕も聞いたらう、また、ただ見たばかりでも大概は知れさうなもんだ。知つてはいはないのはどういふ訳だ。余り愛国心がないではないか。」

「いえ、全く、聞いたのは呻吟声ばかりで、見たのは繃帯ばかりです。」

三

「何、繃帯と呻吟声、その他は見も聞きもしないんだ？ 可加減なことをいへ。」

海野は苛立つ胸を押へて、務めて平和を保つに似たり。

看護員は實際その衷情を語るなるべし、聊も飾気なく、

「全く、知らないです。いつて利益になることなら、何秘すものですか。また些少も秘さ

ねばならない必要も見出さなさいです。」

百人長は訝かし気に、

「して見ると、何か、全然無神経で、敵の事情を探らうとはしなかつたな。」

「別に聞いて見やうとも思はないでした。」

と看護員は手をその額に加へたり。

海野は仕込杖以て床をつつき、足踏して口惜げに、

「無神経極まるじやあないか。敵情を探るためには斥候や、探偵が苦心に苦心を重ね

てからに、命がけで目的を達しやうとして、十に八、九は失敗るのだ。それに最も安全な、

最も便利な地位にあつて、まるでうつちやつて、や、聞かうとも思はない。無、無神経極

まるなあ。」

と吐息して慨然たり。看護員は頸を撫でて打傾き、

「なるほど、左様でした。閑だとそんな処まで気が着いたんでしやうけれども、何しろ病

傷兵の方にばかり気を取られたので、ぬかつたです。些少も準備が整はないで、手当が行

届かないもんですから随分繁忙を極めたです。五分と休む間もない位で、夜の目も合はさ

ないで尽力したです。けれども、器具も、薬品も不完全なので、満足に看護も出来ず、見

殺にしたのが多いのですもの、敵情を探るなんて、なかなかどうして其処々まで、手が廻るものですか。」

「はいまだいひも果ざるに、

「何だ、何だ、何だ。」

海野は獅子吼をなして、突立ちぬ。

「そりや、何の話だ、誰に対する何奴の言だ。」

と囁着かむずる語勢なりき。

看護員は現在おのが身の如何に危険なる断崖の端に臨みつつあるかを、心着かざるもの如く、無心——否むしろ無邪氣——の体にて、

「すべてこれが事実であるのです。」

「何だ、事実！　むむ、味方のためには眼も耳も吝むで、問はず、聞かず、敵のためには粉骨砕身をして、夜の目も合はさない、呼吸もつかないで働いた、それが事実であるか！　いや、感心だ、恐れ入った。その位でなければ敵から感状を頂戴する訳にはゆかない。道理だ。」

「いい懸けて、夢見る如き相手の顔を、海野はじつと瞻りつつ、嘲み笑ひて、声太く、

「うむ、得がたい豪傑だ。日本の名誉であらう。敵から感謝状を送られたのは、恐らく君を措いて外にはあるまい。君も名誉と思ふであらうな。えらい！ 実にえらい！ 国の光だ。日本の花だ。われわれもあやかりたい。君、その大事の、いや、御秘蔵のものであれば、どうぞ一番、その感謝状を拝ましてもらいたいな。」

と口は和らかにものいへども、胸に満たる不快の念は、包むにあまりて音に出でぬ。

看護員は異議もなく、

「確かありましたツけ、お待ちなさい。」

手にせる鉛筆を納るとともに、衣兜の裡をさぐりつつ、

「あ、ありました。」

と一通の書を取出して、

「なかなか字体がうまいです。」

無雑作に差出して、海野の手に渡しながら、

「裂いちやあ不可ません。」

「いや、謹むで、拝見する。」

海野はことさらに感謝状を押し戴き、書面を見る事久しかりしが、やがてさらさらと

線広げて、両手に高く差翳しつ。声を殺し、鳴を静め、片唾を飲みて群りたる、多数の軍夫に掲げ示して、

「こいつを見い。貴様たちは何と思ふ、礼手紙だ。可か、支那人から礼をいつて寄越した文だぞ。人間は正直だ。わけもなく天窓を下げて、お辞儀をする者はない。殊に敵だ、われわれの敵たる支那人だ。支那人が礼をいつて捕虜を帰して寄越したのは、よくよくのことだと思へ！」

いふことば半ばにして海野はまた感謝状を取直し、ぐるりと押廻して後背なる一団の軍夫に示せし時、戸口に丈長き人物あり。頭巾黒く、外套黒く、面を蔽ひ、身軀を包みて、長靴を穿ちたるが、纒に頭を動かして、屹とその感謝状に眼を注ぎつ。濃かなる一脈の煙は渠の唇辺を籠めて渦巻きつつ葉巻の薫高かりけり。

四

百人長は向直りてその言を続けたり。

「何と思ふ。意気地もなく捕虜になつて、生命が惜さに降参して、味方のことはうつつちや

つてな、支那人の介抱をした。そのまた尽力といふものが、一通りならぬのだ。この中にも書いてある、まるで何だ、親か、兄弟にでも対するやうに、恐ろしく親切を尽して遣つてな、それで生命を助かつて、阿容々々と帰つて来て、剩へこの感状を戴いた。どうだ、えらいでないか貴様たちなら何とする？」

「といまだいひもはてざるに、満堂忽ち黙を破りて、哄と諸声をぞ立てたりける、喧轟名状すべからず。国賊逆徒、売国奴、殺せ、撲れと、衆口一斉熱罵恫喝を極めたる、思ひ思ひの叫声は、雑音意味もなき響となりて、騒然としてかまびすしく、あはや身の上ぞと見る眼危き、唯単身なる看護員は、冷々然として椅子に忪りつ。あたりを見たる眼配は、深夜時計の輾る時、病室に患者を護りて、油断せざるに異ならざりき。看護員に迫害を加ふべき軍夫らの意気は絶頂に達しながら、百人長の手を掉りて頻りに一同を鎮むるにぞ、その命なきに前だちて決して毒手を下さざるべく、予て警むる処やありけん、地踏踏みてたけり立つをも、夥間同志が抑制して、拳を押へ、腕を扼して、野分は無事に吹去りぬ。海野は感謝状を巻き戻し、卓子の上に押遣りて、

「それでは返す。しかしこの感謝状のために、血のある奴らが如彼に騒ぐ。殺せの、撲れ」といふ氣組だ。うむ、やつぱり取つて置くか。引裂いて踏むだらどうだ。さうすりや些

少^{つと}あ念^{つと}ばらしにもなつて、いくらか彼^{あいつ}奴^ららが合^が点^{てん}しやう。さうでないで、あれでも御^{みくに}国^にのためには、生命^{いのち}も惜^{おぼ}まない徒^てだ^あから、どんなことをしやうも知^しれない。よく思^し案^{あん}して請^こ取る^うんだ、可^いか^い。」

耳^{みみ}にしながら看護^{かんし}員^{いん}は、事^{こと}もなげに手^てに取り^とりて、海^{うみ}野^のが言^{ことば}の途^と切^きれ^ぎるに、敵^{てき}より得^えた感^{かん}謝^{しゃ}状^{じょう}は早^{はや}くも衣^か兜^{くし}に納^なまりぬ。

「取^とつたな。」と叫^こび^けたる、海^{うみ}野^のの声^{こゑ}の普^た通^たなら^だぎるに、看^{かん}護^ご員^{いん}は怪^{あや}む如^{ごと}く、

「不可^いない^けですか。」

「良心^{りんしん}に問^とへ！」

「やましいことは些^ち少^{つと}もないです。」

いと潔^{けつ}くいひ放^はち^なぬ。その面^{めん}貌^{ぼう}の無^む邪^{じゃ}気^きなる、そのいふこと^{こと}の淡^{たん}泊^{ぱく}なる、要^{よう}するに看^{かん}護^ご員^{いん}は、他の誘^い惑^{わく}に動^{うご}か^かされて、胸^{むね}中^{ちゆう}その是^ぜ非^ひに迷^まぶ^ぶが如^{ごと}き、さる心^{こゝろ}弱^{じやく}きものにはあらず、何^{なに}らか固^かき信^{しん}仰^{やう}ありて、譬^{たと}ひその信^{しん}仰^{やう}の迷^まへるにもせよ、断^つ々^つ乎^{こゝろ}一^{いっ}種^{しゆ}他^たの力^{ちから}の如^{ごと}何^{なに}ともしがたきものありて存^{ぞん}せるならむ。

海^{うみ}野^のはその答^{こたへ}を聞^きくご^{ごと}に、呆^あれ^きもし、怒^{いか}り^だもし、苛^{いら}立^だち^だもしたりけるが、真^ま個^ご天^{てん}真^まなる状^{さま}見^まえて言^{ことば}を飾^かるとは思^しはれ^れざるにぞ、これ実^{まこと}に白^{はく}痴^ち者^{しや}なるかを疑^{うたが}ひつつ、一^{いっ}応^{おう}試^しに愛^{あい}

国の何たるかを教え見むとや、少しく色を和げる、重きものいひの洩がちにも、

「やましいことがないでもあるまい。考へて見るが可。第一敵のために虜にされるといふがあるか。抵抗してかなはなかつたら、何故切腹をしなかつた。いやしくも神州男児だ、腸を掴み出して、敵のしやツ面へたたきつけて遣るべき処だ。それも可、時と場合で捕はれないにも限らんが、撲られて痛いからつて、平気で味方の内情を白状しやうとは、呆れ果た腰拔だ。其上まだ親切に支那人の看護をしてな、高慢らしく尽力をした吹聴もないもんだ。のみならず、一旦恥辱を蒙つて、われわれ同胞の面汚をしてゐながら、洒垂ついで帰つて来て、感状を頂きは何といふ心得だ。せめて土産に敵情でも探つて来れば、まだ言訳もあるんだが、刻苦して探つても敵の用心が厳しくつて、残念ながら分らなかつたといふならまだも恕すべきであるに、先に将校に検べられた時も、前刻吾が聞いた時も、いひやうもあらうものを、敵情なんぞ聞かうとも、見やうとも思はなかつたは、実に驚く。しかも敵兵の介抱が急がしいので、其様ことあ考へてる隙もなかつたなんぞと、憶面もなくいふ如きに至つては言語同断といはざるを得ん。国賊だ、売国奴だ、疑つて見た日にやあ、敵に内通をして、我軍の探偵に来たのかも知れない、と言はれた処で仕方がないぞ。」

五

「さもなければ、あの野蛮な、残酷な敵がさうやすやす捕虜を返す法はない。しかしそれには証拠がない、強て敵に内通をしたとはいはん、が、既に国民の国民たる精神のない奴を、そのままにして見遁がしては、我軍の元氣の消長に関するから、屹と改悟の点を認むるか、さもなくば相当の制裁を加へなければならん。勿論軍律を犯したといふでもないから、将校方は何の沙汰をもせられなかつたのであらう。けれどもが、われわれ父母妻子をうつつちやつて、御国のために尽さうといふ愛国の志士が承知せん。この室にゐるものは、皆な君の所置ぶりに慊焉たらざるものがあるから、将校方は黙許なされても、其様な国賊は、屹と談じて、懲戒を加ゆるために、おのおの決する処があるぞ。可か。その悪むべき感謝状を、かういつた上でも、裂いて棄てんか。やつぱり疚ましいことはないが、些少も良心が咎めないか、それが聞きたい。ぬらくら返事をしちやあ不可ぞ。」

看護員は傾聴して、深くその言を味ひつつ、默然として身動きだもせず、良猶予ひて言はざりき。

こなたはしたり顔に附入りぬ。

「屹と責任のある返答を、此室にゐる皆に聞かしてもらはう。」

いひつつ左右を睥したり。

軍夫の一人は叫び出せり。「先生。」

渠らは親方といはざりき。海野は老壯士なればなり。

「先生、はやくしておくむなせえ。いざこざは面倒でさ。」

「撲つちまへ！」と呼ぶるものあり。

「隊長、おい、魂を据へて返答しろよ。へむ、どうするか見やあがれ。」

「腰拔め、口いきくが最後だぞ。」

と口々にまたひしめきつ。四、五名の足のばたばたと床板を踏鳴らす音ぞ聞こえたる。

看護員は、海野がいはゆる腕力の今ははやその身に加へらるべきを解したらむ。されども渠は聊も心に疚ましきことなかりけむ、胸苦しき氣振もなく、静に海野に打向ひて、

「些少も良心に恥ぢないです。」

軽く答へて自若たりき。

「何、恥ぢない。」

といひ返して海野は眼を睜りたり。

「もう一度、屹とやましい処はないか。」

看護員は微笑みながら、

「繰返すに及びません。」

その信仰や極めて確乎たるものにてありしなり。海野は熱し詰めて拳を握りつ。容易くはものも得いはで唯、唯、渠を睨まへ詰めぬ。

時に看護員は従容、

「戦闘員とは違ひます、自分をお責めなさるんなら、赤十字社の看護員として、そしておはなしが願ひたいです。」

いひ懸けて片頬笑みつ。

「敵の内情を探るには、たしか軍事探偵といふのがあるはずです。一体戦闘力のないものは敵に抵抗する力がないので、遁げらるれば遁げるんですが、行り損なへばつかまるです。自分の職務上病傷兵を救護するには、敵だの、味方だの、日本だの、清国だのといふ、左様な名称も区別もないです。唯病傷兵のあるばかりで、その他には何にもないです。丁

度ようど自分が捕虜とりこになつて、敵陣にゐました間に、幸ひ依頼をうけましたから、敵の病兵を預りました。出来得る限り尽力をして、好結果を得ませんと、赤十字の名折なわれになる。いや名折は構はないでもつまり職務の落度となるのです。しかしさつきもいひます通り、我軍と違つて実に可哀想だと思ひます。気の毒なくらゐる万事が不整頓で、とても手が届かないので、ややともすれば見殺しです。でもそれでは済まないのです、大變に苦勞をして、やうやう赤十字の看護員といふ躰たいめん面だけは保つことが出来ました。感謝状は先まづそのしるしといつていいやうなもので、これを国への土産みやげにすると、全国の社員は皆満足みんなに思ふです。既に自分の職務さへ、辛かろうじて務めたほどのものが、何の余裕があつて、敵情を探るなんて、探偵や、斥候の職分が兼ねられます。またよしんば兼ねることが出来るにしても、それは余計なお世話であるです。今貴下あなたにお談し申すことはなも、お検しらべになつて将校方しやうこうにいつたことも、全くこれにちがひはないのでこのほかにいふことは知らないです。毀譽褒貶きよほうへんは仕方がない、逆賊でも国賊でも、それは何でもかまはないです。唯看護員でさへあれば可いしかし看護員たる躰面を失つたとでもいふことなら、弁解も致します、罪にも服します、責任も荷ふです。けれども愛国心がどうであるの、敵愾心てきがいしんがどうであるのと、左様さようなことには関係しません。自分は赤十字の看護員です。」

と淀みなく陳べたりける。看護員のその言語には、更に抑揚と頓挫なかりき。

六

見る見る百人長は色激して、碎けよとばかり仕込杖を握り詰めしが、思ふこと乱麻胸を衝きて、反駁の緒を発見し得ず、小鼻と、髯のみ動かして、しらけ返りて見えたりける。時に一人の軍夫あり、

「畜生、好きなことをいつてやがらあ。」

声高に叫びざま、足疾に進出て、看護員の傍に接し、その面を覗きつつ、

「おい、隊長、色男の隊長、どうだ。へむ、しらばくれはよしてくれ。その悪済ましが気に喰はねえんだい。赤十字社とか看護員とかツて、べらんめい、漢語なんかつかいやあがつて、何でえ、躰よく言抜けやうとしたつて駄目だぜ。おいらア皆な知てるぞ、間抜けいへむ畜生、支那の捕虜になるやうぢやあとも日本で色の出来ねえ奴だ。唐人の阿魔なんぞに惚れられやあがつて、この合の子め、手前、何だとか、彼だとかいふけれどな、南京に惚れられたもんだから、それで支那の介抱をしたり、贖金をしたりして、内幕を知

つててもいはねえんぢやあねえか。かう、おいらの口は淨玻璃じようはりだぜ。おいらあしよつちう知つてるんだ。おい皆聞かつし、初手しよてはな、支那人チャンチャンの金満ながれだまが流丸くらを啖くつて路傍みちばたに僵たおれてゐたのを、中隊長様が可愛想だつてえんで、お手当をなすつてよ、此奴こいつにその家まで送らしてお遣やなすつたのがはじまりだ。するとお前その支那人チャンを介抱して送り届けて帰りしなに、支那人の兵隊が押込むだらう。面くらいやアがつてつかまる処をな、金満の奴やつこさん恩儀を思つて、無性むしように難ありがた有がつてる処だから、きわどい処を押隠して、やうやう人目を忍ばしたが、大勢押込むでゐるもんだから、秘かくしきれねえでどうどう奥の奥の奥ウの処むすめの、女の部屋へ秘したのよ。ね、隠れて五日いつかばかり対さしむか向むかひでゐるあひだに、何でもその女が惚ほれたんだ。無茶におツこちたと思ひねえ。五日目に支那の兵が退ひいてく時つかめえられてしよびかれた。何でもその日のこつた。おいら五、六人で宿营地へ急ぐ途中ちゆうちゆう、酷ひどく吹雪ふぶく日で眼も口もあかねへ雪中ぶつたお中に打倒たおれの、半分埋うまつて、ひきつけてゐた婦人おんながあつたい。いつて見りや支那人チャンの片割かたわれではあるけれど、婦人だから、ねえ、おい、構かまふめえと思つて焚火たきびであつたためて遣ると活返いきけえつた李花りかてえ女むすめで、此奴こいつがエテよ。別離わか苦かれに一目ひとめてえんで唯一人たつちひとり駈出かけだしてさ、吹雪僵ふぶきだおれになつたんだとよ。そりや後あとで分つたが、その時あ、おいらツちが負おふつて家うちまで届けて遣つた。その因縁いんえんでおいらちよいちよい

父親おやじの何とかてえ支那の家へ出入をするから、悉くわしいことを知つてゐるんだ。女はな、ものずきじゃあねえか、この野郎が恋しいとつて、それつきり床とこ着いてよ、どうだい、この頃じやもう湯も、水も通らねえツさ。父親おやじなんざ気を揉もんで銃てつぽうきもまだすつかりよくならねえのに、此奴こいつの音信たよりを聞かうとつて、旅団本部へ日参にっさんだ。だからもう皆みんながうすうす知つてゐるぜ。つい隊長様はなしなんぞのお耳へ入つて、御存じだから、おい奴やつこさむ。お前お前お檢しらべの時もそのお談話はなしをなすつたらう。ほんによ、お前がそんな腰拔たあ知らねえから、勿も体つてえねえ、隊長様までが、ああ、可哀想だ、その女の父親とか眼を懸けて遣つかはせとおつしやらあ、恐おそしい冥みよう伽がだぜ。お前そんなことも思はねえで、べんべんと支那兵チャンチャンの介抱かいほうをして、お礼をもらつて、恥かしくもなく、のんこのしやあで、唯今歸つて来はどういふ了見だ。はじめに可哀想だと思つたほど、憎にくくてならねえ。支那チャンの探偵いぬになるやうな奴はやまとだましい、大和魂やまとたましを知らねえ奴だ、大和魂を知らねえ奴あ日本人のなかまじやあねえぞ、日本人のなかまでなけりや支那人チャンも同おんなじ一だ。どてツ腹あ蹴破けやぶつて、このわたを引ずり出して、囓かみつ潰つぶして吐出すんだい！」

「其処そこだ！」と海野は一喝いっかつして、はたと卓子ていぶるを一人ひとり打うちせり。かかりし間他あいだの軍夫は、しばしば同情の意を表して、舌者ぜっしやの声を打消すばかり、熱罵ねつばを極めて威嚇いかくしつ。

楚歌^{そか} 一身^{あつま}に聚りて集合せる腕力の次第に迫るにもかかはらず眉宇^{びゆう}一点の懸念^{けねん}なく、いと
 晴々^{はればれ}しき面色^{おももち}にて、渠^{かれ}は春^{しゆんちゆうせき} 昼^{しゆう}寂^{じやく}たる時、無聊^{むりよう}に堪^たえざるものの如く、片膝^{かたひざ}を片
 膝^{かたひざ}にその片膝^{かたひざ}を、また片膝^{かたひざ}に、交^{かわ}る交^{かわ}る投懸^{なげか}けては、その都度^{つど}靴音^{くつね}を立つるのみ。胸中^{むねぢゆう}お
 のづから閑ある如し。

けだし赤十字社の元素たる、博愛のいかなるものなるかを信ずること、渠の如きにあら
 ざるよりは、到底これ保ち得がたき度量ならずや。

「其^{そこ}処^こだ。」と今^{てい}卓^{いぶる}子^こを打てる百人長は大に決する処ありけむ、屹^{きつ}と看護員に立向ひて、
 「無神経でも、おい、先刻^{さつき}からこの軍夫のいふたことは多少耳へ入つたらうな。どうだ、

衆目の見る処、貴様は国体のいかむを解さない非義、劣等、怯^{きようじ}奴^{やつ}である、国賊である、
 破廉恥、無気力の人^{にんが}外^{がい}である。皆^{みんな}が貴様を以て日本人たる資格のないものと断定したが、
 どうだ。それでも良心に恥ぢないか。」

「恥ぢないです。」と看護員は声に応じて答へたり。百人長は頷^{うなず}きぬ。

「可^{よし}、改めていへ、名を聞かう。」

「名ですか、神崎^{かみざき}愛^{あい}三^{さん}郎^{ろう}。」

七

「うむ、それでは神崎、現在ある、此処は一体何処だと思ふか。」

海野は太くあらたまりてさもものありげに問懸けたり。問はれて室内を眊しながら、

「左様、何処か見覚えてゐるやうな気持もするです。」

「うむ分るまい。それが分つてゐさへすりや、口広いことはいへないわけだ。」

顔に苔むしたる髯を撫でつつ、立ちはだかりたる身の丈豊かに神崎を瞰下ろしたり。

「此処はな、柳が家だ。貴様に惚れてゐる李花の家だぞ。」

今経歴を語りたりし軍夫と眼と眼を見合はして二人は二タリと微笑めり。

神崎は夢の裡なる面色にてうつとりとその眼を睜りぬ。

「ぼんやりするな。柳が住居だ。女の家だぞ。聞くことがありや何処でも聞かれるが、故と此処へ引張つて来たのには、何かわれわれに思ふ処がなければならぬ。その位なことは、いくら無神経な男でも分るだらう。家族は皆追出してしまつて、李花はわれわれの手の内のものだ。それだけ予め断つて置く、可か。」

さ、断つた上でも、やつぱり看護員は看護員で、看護員だけのことをさへすれば可、む

しろ他のことはしない方が当^{あたり}前^{まえ}だ。敵情を探るのは探偵の係で、戦^{たたか}にあたるものは戦闘員に限る、いふて見れば、敵愾^{てきが}心を起すのは常業のない閑人^{ひまじん}で、進^{すす}で国家に尽すのは好事家^{ものずき}がすることだ。人は自分のすべきことをさへすれば可^い、われわれが貴様を責めるのも、勿論のこと、ひまだからだ、と煎^{せん}じ詰めた処さういふのだな。」

神崎は猶^た予^めらはで、

「左様^{さよう}、自分は看護員です。」

この冷かなる答を得え百人長は決意の色あり。

「しつかり聞かう、職務外のことは、何にもせんか！」

「出来ません。余裕があれば綿^{めん}織^お糸^{いと}を造るです。」

応答はこれにて決せり。

百人長はいふこと尽きぬ。

海野は悲痛の声を挙げて、

「駄目だ。殺しても何にもならない。可^よ、いま一ツの手段を取らう。権^{ごん}！ 吉^{きち}！ 熊^{くま}！

一件だ。」

声に応じて三名の壮^{わかも}佼^のは群を脱して、戸口に向へり。時に出口の板戸を背にして、木

像の如く突立ちたるまま両手を衣兜かくしにぬくめつつ、身動きもせで煙草たばこをのみたる彼の真黒なる人物は、靴音高く歩を転じて、渠かれらを室外いに出しやりたり。三人は走り行きぬ。走りきたる三人の軍夫は、二人左右より両手を取り、一人後うしろより背せなを推おして、端麗たんれい多く世に類なき一個清国の婦人の年とし少わかなるを、荒けなく引立て来りて、海野の傍かたえに推据おしへたる、李花は病床びとくにありしなる、同じ我家の内ながら、渠は深窓に養はれて、浮世の風は知らざる身の、爾しかくこの室に出でたるも恐らくその日が最はじめ初はじめてならむ、長き病やまに倂おも寔かれて、寝衣んいの姿いなよなく、簪かんざしの花も萎しぼみたる流罪るさいの天女てんに憐あわれむべし。

「国賊！」

と呼懸えんびけつ。百人長は猿臂えんびを伸ばして美しき犠牲いけにえの、白うなじき頸うなじを搔か掴つかみ、その面おもてをば仰のげざまに神崎の顔に押向けぬ。

李花は猛獸どくじやに手を取られ、毒蛇どくじやに膚はだを絡まとはれて、恐怖の念もあらざるまで、遊魂半ゆうこんば天ちように朝あして、夢現の境にさまよひながらも、神崎を一目見るより、やせたる頬ほおをさとあかめつ。またたきもせで見詰にわかめたりしが、俄にわかに縋そうの身みを震ふるはして、

「あ。」と一声血しほを絞しぼれる、不意の叫声しりいに驚おきて、思はず軍夫が放たてる手に、身を支えたる力を失して後居しりいにはたと僵たおれたり。

看護員は我にもあらで衝とその椅子より座を立ちぬ。

百人長は毛脛をかかげて、李花の腹部を無手と踏まへ、ぢろりと此方を流眄に懸けたり。

「どうだ。これでも、これでも、職務外のことをせねばならない必要を感じせんか。」

同時に軍夫の一団はばらばらと立懸りて、李花の手足を圧伏せぬ。

「国賊！ これはどうだ。」

海野はみづから手を下ろして、李花が寝衣の袴の裾をびりりとばかり裂けり。

八

時に彼の黒衣長身の人物は、ハタと煙管を取落しつ、其方を見向ける頭巾の裡に一双の眼爛々たりき。

あはれ、看護員はいかにせしぞ。

面の色は変へたれども、胸中無量の絶痛は、少しも挙動に露はさで、渠はなほよく静を保ち、徐ろにその筒服を払ひ、頭髮のやあのびて、白き額に垂れたるを、左手にやをら搔上げつつ、卓の上に差置きたる帽を片手に取ると斉しく、肅然と身を起して、

「諸君。」

とばかり言ひすてつ。

海野と軍夫と、軍夫と、軍夫と、軍夫と、軍夫の隙より、真白く細き手の指の、のびつ、屈みつ、洩れたるを、纒に一目見たるのみ。靴音軽く歩を移して、そのまま李花に辞し去りたり。かくて五分時を経たりし後は、失望したる愛国の志士と、及びその腕力と、皆疾く室を立去りて、暗澹たる孤燈の影に、李花のなきがらぞ蒼かりける。この時までも目を放たで直立したりし黒衣の人は、濶歩坐中に動き出て、燈火を仰ぎ李花に俯して、嚴然として椅子に凭り、卓子に片肱附きて、眼光一閃鉛筆の尖を透し見つ。電信用紙にサラサラと、

月 日 海城発

予は目撃せり。

日本軍の中には赤十字の義務を完して、敵より感謝状を送られたる国賊あり。しかれどもまた敵愾心のために清国の病婦を捉へて、犯し辱めたる愛国の軍夫あり。委細はあとより。

じよん、べるとん

英国ロンドン府、アワリー、テレグラフ社 編^{へん} 輯^{しゅう} 行

青空文庫情報

底本：「外科室・海城発電 他五篇」岩波文庫、岩波書店

1991（平成3）年9月17日第1刷発行

2000（平成12）年9月5日第18刷発行

底本の親本：「鏡花全集 別巻」岩波書店

1976（昭和50）年3月26日第1刷発行

初出：「太陽」第二巻第一号

1896（明治29）年1月

※本文中、「恁りつ」は「凭りつ」、「※」#「目十旬」、第3水準1-88-80]」は「※」
#「目十旬」、第4水準2-81-91]」の誤りと思われませんが、底本の通りにしました。

※「読みにくい語、読み誤りやすい語には現代仮名づかいで振り仮名を付す。」との底本の編集方針にそい、ルビの拗促音は小書きしました。

入力：門田裕志

校正：鈴木厚司

2003年8月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

海城発電

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>